

連携医院のご紹介

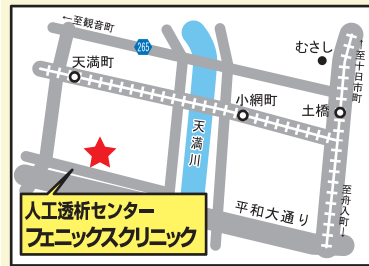
「確かな技術とアットホームな対応」をモットーに診療をされている、西区観音町にある“人工透析センターフェニックスクリニック”の奥新小百合院長にお話を伺いました。



奥新院長とスタッフ

人工透析センター フェニックス クリニック

〒733-0031
広島市西区観音町7番29号
電話/082-293-8400
院長/奥新 小百合
(おくしん さゆり)
専門/人工透析内科



○いつ開業されましたか。

平成8年に開院しました。元々、関連施設の梶川病院で透析医療を行っていましたが、手狭になったため移転先を探していたところ、現在の場所である県営住宅の1Fをお借りすることができたので移ってきました。

○開業されてから今までのことを教えてください。

透析技術の進歩に伴い、お身体のご負担を軽減させるための長時間透析、より多くの老廃物を取り除くことが出来るオンラインHDF、送迎システムなど、心身のご負担を軽減しながら患者さんの状態に合わせた透析療法を提供させていただいております。現在では33台の透析機器があり、待ち時間を少しでも減らすため、お一人お一人に予約をとるようにしています。

○毎日の診療で大切にされていることや、やりがいは？

腎臓疾患の巨匠といわれた亡き「太田和夫」先生のお言葉です。「透析者は重い荷を背負って、雪の稜線を歩いている登山者のようだ。ちょっとした油断や不注意が、思いがけない結果を招いてしまう。透析スタッフは良きガイドとなり、また心の温かい山小屋の主人となって、長い尾根つたいの道を、病を共有する心で共に歩んでゆきたい」なかなか至りませんが、心して努めたいと思っています。

○県病院はどんなところで すか。県病院に一言。

良好な受け入れや丁寧なお返書など、いつも良くして頂き、心から感謝しております。

実は現院長である板本敏行先生には当院に非常勤医師として、働いていただいていた時期がございました。消化器外科の先生であるにも関わらず動脈穿刺など様々な処置を進んで行ってくださったことや他の医師を気にかけてくださるお姿が印象に残っております。

○その他

関連施設として内科・泌尿器の治療から緊急の入院透析も可能な「梶川病院」があるほか、「居宅介護支援事業所リンデン」や「老人保健施設こぶしの里」といった介護保険サービス事業も充実しております。



外観

【取材後記】
平和大通りに面しており、とてもアクセスしやすい場所だと思いました。写真撮影ではスタッフの方々も参加いただき、とても雰囲気の良いクリニックだと感じました。

もみじ



県立広島病院 ☎082-254-1818 (代)
〒734-8530 広島市南区宇品神田1丁目5番54号



理念：県民の皆様に愛され信頼される病院をめざします

教えて

Dr. 55

大腸がんに対するロボット手術

専門診療医による得意治療を紹介いたします。

消化器外科



消化器外科部長
ゲノム診療科部長
三口 真司

◆ロボット手術とは？

手術支援ロボット「ダヴィンチ」は、人間の手の代わりに役割をするアームを4本持っており、そのアームにお腹の中を観察するカメラ、お腹の中を操作する鉗子を付けることができます。術者は挿入したカメラからの映像をコンソール（ロボットを操るコクピット）の中で見ながらロボットの鉗子を動かし手術を行います。カメラ先端には2つのレンズが装備されており、お腹の中の映像が拡大され鮮明な3次元（3D）画像として映し出されます。術者は、その映像を見ながらコンソールに座ってリラックスした姿勢で手術をすることができます。



ダヴィンチ



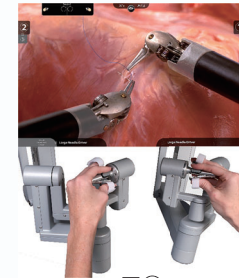
コンソール



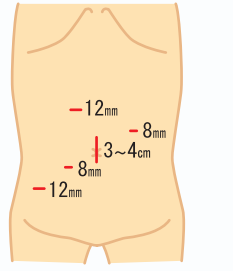
レンズ

◆ロボット手術って何が良いの？

術者が直接鉗子を握らないので手振れもなく、手首（リスト）や多関節をもった自由な動きが可能な鉗子で繊細な操作が可能です（図①）。数カ所の小さな穴の切開部から手術を行うため（図②）、傷が小さく、傷の痛みも軽く、手術後の回復が早く、患者さんの負担が軽減されます。



図①



図②

◆ロボット手術が有用な手術って何？

2018年から直腸がんに対するロボット支援直腸切除術が保険収載されました。大腸の中でも最も肛門側に位置する直腸は、骨盤内にある大腸になります。その直腸を切除するには、狭く奥深い骨盤内での操作が必要となるため、従来からある腹腔鏡手術では、使用する鉗子は直線的な動きしかできず、狭い骨盤内での操作は時に難渋します。それに対して、ロボット手術では狭い骨盤内で鉗子を自由に動かせるので、繊細で正確な操作ができます。そのため、直腸がんの術後合併症の一つである神経障害（排尿障害や性功能障害）の発症を少なくすることができ、また、手術中の出血も少なくすることもできます。肛門を温存できるか悩ましい、非常に肛門に近い直腸がんを切除する場合、特にロボット手術の有用性は増します。

直腸がんと診断された際には、手術のために紹介してもらった病院でロボット手術が受けられるかどうか担当の先生に尋ねてください



次ページは医療従事者向けです→

県立広島病院からのお知らせ

7月のがんサロン

- 開催日 令和4年 7月12日(火)
- 時間 14:00～15:00
- 場所 新東棟2階 研修室 及び ZOOM参加
- テーマ 家で過ごしたい（在宅医療）
みんなはどう考えているのかなこれからの過ごし方
- 講師 なかたに外科・在宅クリニック/
中谷玉樹院長
- 対象 悪性腫瘍（がん）の患者さん及びそのご家族
当院での受診歴は問いません
- 問合せ がん相談支援センター
☎082-256-3561（定例）
※感染状況によりオンラインのみに変更場合があります。
※事前申し込みが必要です。



職員有志で病院の 清掃を行いました！

県立広島病院では、毎年数回にわたって職員有志による病院敷地内の清掃を行っております。今年春のボランティア清掃は、雨天により一度延期したものの、4月28日（木）に無事執り行い、患者さんやご家族の通行を妨げないように注意しながら、草取りや落ち葉集め、ゴミ拾いを行いました。

これからも皆様に愛され信頼される病院となりますよう、患者サービスの向上に取り組んでまいります。



院長をはじめとした参加者の面々です。

◆大腸がんに対するロボット支援手術の適応

1990年代に米国で手術支援ロボット（ダヴィンチ・サージカルシステム）が開発され、本邦でも2018年4月から、直腸がんに対するロボット支援手術が保険適用となり急速に普及しています。さらに、2022年4月から、結腸がんに対してのロボット支援手術が保険適用となりました。当院でも、全ての直腸がんをロボット支援手術の適応として積極的に行っております。

◆従来の腹腔鏡手術に対するロボット支援手術のメリット

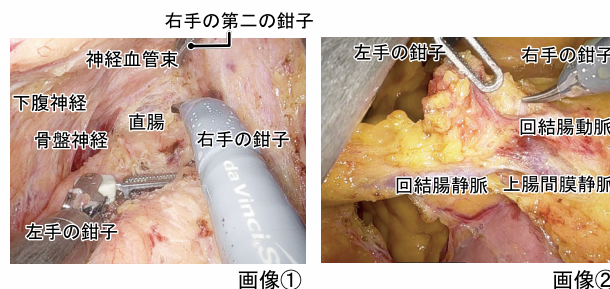
- カメラ・鉗子すべてを術者1人がコントロールするため安定したカメラワークで効果的な術野展開ができる。
- ロボットのアームによる安定した力で多方向への組織の牽引ができる。
- ロボット鉗子の多関節機能により多方向から組織に手振れなくアプローチできる。

大腸がんに対する手術は、大まかに①腸管と腸間膜を周囲の温存する組織から外す剥離操作、②腸に血流を送っている血管処理、リンパ節摘出の2つのパートから成ります。

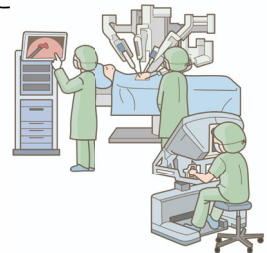
直腸がん手術では、①のパートで注意を要します。温存する組織として、下腹神経・骨盤神経があり、それら神経を損傷または誤って切除してしまうと術後に永続的な排尿/性機能障害の合併症が生じます。特に、肛門に近い下部直腸がんの場合は狭い骨盤深部の空間での剥離操作が必要で、ロボット支援手術はそのような場面で温存する神経の同定が確実にでき、剥離もやりやすく非常に威力を発揮します（画像①）。

ロボット支援手術では、従来型の腹腔鏡手術に比べ術後の排尿/性機能障害の合併症が減るということが報告されていることに実際に手術をしていて納得しています。

結腸がん手術（特に上行結腸・横行結腸がんに対する結腸右半切除術）では、②のパートで注意を要します。血管走行にバリエーションがあり、処理する血管の同定が困難であり、一旦処理する血管から出血すると、止血に難渋し大量出血する場合もあります。ロボット支援手術では多関節・手首を有する鉗子で血管に多方向からアプローチでき、血管を同定しやすく出血なく安全に処理することが可能で（画像②）、そのことは精緻なリンパ節の摘出につながり、がんの予後向上に寄与できる可能性があります。



直腸がんの中でも、肛門を温存できるかどうか悩ましいような肛門近傍の下部直腸がん、上行結腸・横行結腸がんにこそ、ロボット手術が有用ですので、そのような患者さんがおられましたら、当院にご紹介下さい。



外科医の独り言...no.129

— 無趣味が趣味？ —

いつも立て板に水、機関銃の如くお話しされる患者さんが、今日は様子が違うようでした。聞くと、どうも最近の「外科医の独り言」が面白くないとのこと。コロナの話ばかりで、患者さん好みの“ほっこり”した面白い話が少ないとのことでした。確かにこの2年間は、私の頭からコロナの幻影が消えることはなく、今回もコロナの話で申し訳ありません。でも、この呪縛から解放される日もそう遠くないかもしれません。

先日の新聞に、コロナ専門家会議の提言が掲載されていました。病院や医療介護施設内での頻回の消毒は不要、コロナ専用病棟を作らなくても病室単位の区分けの管理でよい、感染者と密着しない場合には防護用ガウンを着なくてよい、などという提案です。ということは、近いうちにインフルエンザと同様の対応で良いということになるかもしれません。

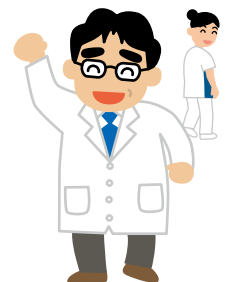
さて皆さん「もう普通に戻っても良いですよ」と急に言われてもなかなか「ハイそうですか」といえないかもしれません。この2年間で染みつけた新生活様式が完全には元に戻らないかもしれませんが、晴れて解放された折には最初に何をしますか？旅行ですかね？私とはとにかくマスクを外して話をしたいですね。マスクをしているとコミュニケーションを取りにくく、子供の成長にもよくないと言われていますが、私もその通りだと思います。マスクをしていると誰か分からず大変な失礼をやらす可能性もあります。手術室の看護師さんはいつもマスクをしているので、普段会うと誰だか分からず、思わず手で鼻と口を隠してやっと「あ～〇〇さん」と認識することになります。これは手術室あるあるです。一方で、素顔を見られるのが嫌だからマスクを外したくないという人も結構いるようです。マスクはもう顔の一部ということでしょうか？そもそも感染対策としてマスクを着用するのであれば顔にぴったりと密着していな

れば効果はありません。そうすると息が苦しくなるので、感染対策の必要がなければできるだけ外したいというのが本音です。

次は、酒を飲みながら思いっきりカラオケで歌いたいですね。この2年間大声を出してはいけないと言われてきて、クラスター発生の元凶のように言われたカラオケに行くのが、はばかられました。これまで大声で歌ってストレスを発散してきたのが急にカラオケはダメということになり、そのためか声を出す筋肉が衰えて声帯が委縮し、どうも最近むせる回数が増えてきたような気がします。このままだとそう遠くない日に誤嚥性肺炎を起こしそうです。ついでに、いつもマスク越しの会話なので耳も遠くなってきたような気がします。

あとはこの2年間でできなかった送別会のリベンジ、そして、ええ～と、うん？意外にやりたいことが見つかりません。ここで無趣味だということがバレてしまいました。まだ子供が家にいる時には父親としての役目が色々あり、結構忙しかったのですが、子供が全員巣立った途端にすることがなくなりました。「あっ孫がおる」と思い直しましたが、ジジババが出しゃばりすぎると良いことにはならないのは世の常で、ほどほどにしておきます。

さて、これで仕事もやめてしまうと本当にすることがなくなります。よく考えるとこれまで、仕事が趣味と真面目な顔をして答えていました。先日、出した本の“はじめに”の中に「医者っておもしろいぞ」と書いてしまいましたが、実は他にすることがなかったのでそう書いたのかもしれませんが。まあ医者に限らず、仕事以外に趣味がなく、仕事に一生懸命没頭していれば、それはそれで楽しいと感じるということで「どんな仕事も一生懸命やれば楽しいぞ」と訂正が必要です。



院長/板本 敏行

脳心臓血管カンファレンス

脳心臓血管センター長 / 上田 浩徳

肺動脈性肺高血圧 (Pulmonary Artery Hypertension; PAH)

肺高血圧 (Pulmonary Hypertension; PH) 症は種々の病態によって引き起こされる難治性疾患です。その症状は、初発症状として労作時息切れ、易疲労感、胸部違和感、失神、喀血、動悸等を認め、病気の進行に伴い、肝うっ血や消化管浮腫に伴う腹部膨満感、早期の満腹感、食欲不振などの消化器症状、下腿浮腫を認めます。

診断は、最終的には右心カテーテルを用いて行われます（実測した平均肺動脈圧が25mmHg以上）。また、心エコー検査はスクリーニングとして有用で、三尖弁逆流最高血流速度を測定（3.4m/secを超えるとPHの可能性が高い）するとともに、PHを疑う他のエコー所見である右房・右室の拡大、拡大された右室による心室中隔の扁平化（左室D-shape）、肺動脈血流速度波形（駆出波形の立ち上がりから最大流速までの時間acceleration timeの短縮と収縮早期にピークを持つ二峰性の波形“midsystolic notching”）も

合わせてPHの可能性が高いか判断します。

PHは病因論的に5つの群に臨床分類されています（ニース分類2013年）。典型的臨床像を呈する疾患群が1群のPAHで、肺の小動脈がリモデリングによって狭小化し、PHを来します。その中には遺伝的に解明されているものや原因不明の特発性のもの、薬物・毒物誘発性のもの、結合組織病いわゆる膠原病（全身性強皮症、全身性エリテマトーデス、シェーグレン症候群など）に合併するもの、ヒト免疫不全（Human Immunodeficiency Virus; HIV）感染症に伴うもの、肝疾患による門脈圧亢進症に伴うもの、先天性心疾患に伴うものなどがあります。PAHは難治性疾患ではありますが、近年の薬物治療のめざましい発展によって、予後の改善を示すデータが多数報告されており、PAHを早期に発見し、予後改善につなげていくことが重要と考えます。



ご意見箱

「患者さんご意見」をゆっくり読みたい

来院時、時間がなくて院内に置いてある掲示用ノートが読めないのHPに掲載してほしい。また、掲示板から外されると、対応状況が確認できなくなるから、しばらく貼り出したままにして、HP上にある「ご意見箱」ページをこまめに更新してほしい。

これからも皆様のご意見に対応していきます

「患者さんからのご意見」等につきましては、スペース等の関係上、掲示板への長期掲載は難しいので、これまで通り最新のものを掲示板に掲載し、過去分は中央棟ホールにある意見箱の横に掲示用ノート『患者さんの声』として設置しております。回収月ごとにインデックスを付け、探しやすく改善をいたしました。そして当院HPには代表的な対応状況を「患者さんご意見箱」に掲載していますが、今後は月ごとに更新していきます。